

令和2年度
印西市民アカデミーだより
 ぶらす
 第7号

印西の石造物 -その1-

印西市内を散策すると、数多くの石造物に出会えます。これらの石造物が立てられた目的や彫刻の意味を知ること、地域の歴史や当時の信仰等を知ることができます。今号から、市内の石造物について紹介していきます。

<p>庚申塔 (こうしんとう)</p> 	<p>道教に由来する庚申信仰に基づいて建てられた石塔。室町時代ごろから各地で「庚申講」が行われ庚申供養塔が建てられた。近世からの村落共同体建立の石塔を代表する石造物である。</p>	<p>月待塔 (つきまちとう)</p> 	<p>特定の月例の夜に集まり月待行事を行った講中で、供養の記念として造立した塔である。十九夜塔には、本尊の如意輪観音が刻まれている。二十三夜塔には、勢至菩薩が刻まれている。</p>
<p>子安塔 (こやすとう)</p> 	<p>若い主婦が集まって子を授かることを願い、安産を祈り、子の健やかな成長を念ずるといった子安講の人々によって造立された塔。女人信仰の十九夜講が変化する中で子安観音が生み出された。</p>	<p>地蔵菩薩塔 (じそうぼさつとう)</p> 	<p>六道(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天)を行脚する地蔵菩薩の尊像を表したもの。江戸時代になって庶民信仰の対象として広く農村に定着し盛んに造られるようになった。</p>
<p>馬頭観音塔 (ばとうかんのんとう)</p> 	<p>農村に馬が普及し、馬の役割が大きくなった江戸時代後半から、六観音の一尊である馬頭観音が多く祀られるようになった。動物の供養塔としての意味合いが強い。</p>	<p>疱瘡石祠 (ほうそうせき)</p> 	<p>不治の病と恐れられた疱瘡は、疫病をもたらす悪神の行為であると信じられ、疱瘡を防ぐには、その神の心を和ませることにあるとして供養塔を造立した。</p>